

日付:2015年6月28日／聖書:出エジプト記3:1～15

主題:「はざ間に生きる」

私たちは様々な「はざ間」の中に生きている者である。家庭や、学校、職場、又は、国や地域の中のはざ間に置かれている。モーセはまさに、はざ間の申し子とも言える。ヘブライ人でありながらエジプト人として育ち、ヘブライ人とエジプト人のはざ間に生きた。モーセが成人し、いつの頃からか、実は自分がヘブライ人の血が流れていることに気づかされ、自らのアイデンティティーに悩み葛藤する。ある時、同胞であるヘブライ人の過酷な重労働、鞭打たれる姿を見かねて、モーセは暴力を持ってその場の解決を図った。しかし、「暴力」は決して平和や和解をもたらすものではない。モーセは、エジプト人とヘブライ人のはざ間に在って、同化しようと努めるが、自らの力では成しえず、むしろ、彼自身がもうこの地にいることさえ出来なくなり、逃亡者となった。

モーセは、ミディアンの地で羊飼いとして人の道を歩んでいた。過去を捨て、身を隠して安定した生活を営んでいた。ある時、羊の群れを荒れ野の奥へ追っていると、不思議な光景に出くわす。燃えているのに燃え尽きない柴を見つける。モーセは、しばし「道をそれて」神に出会う。そして、神の前に立ち、燃える柴に炙(あぶ)られていく。モーセはそこで、「わたしは何者でしょう」と自己を問い、又、神は何というお方なのかと、神を問う。ヘブライ人とエジプト人のはざ間に生きることを避け、寄留者となったモーセを、神は再び、「はざ間」の中に追いやる。ただ以前と違うことは、そのはざ間に、神が先立ち、「あなたと共にいる」と神は約束されたのであった。

「はざ間に生きる」とは何か。モーセが、ヘブライ人とエジプト人のはざ間に生きようとする時、結局、彼は人間的な行為により、そこを追われ、そのはざ間に生きられない者となった。しかし今や、モーセは、神と人々のはざ間に生きようとする時、彼は豊かに主に用いられようとしている。燃える柴に炙られながら、余分な脂をしたり落としながら、神に向き合い生きようとする。私たちは、このところから多くを学び得ることが出来るのではないか。私たちは、日常の生活をしばしそれて、人の道をそれて、主の日の礼拝に集い、神の燃える柴に炙られている者か。神と人々のはざ間に生きることに気づかされている者か。

ただ、私たちのあらゆる「はざ間」には、到底越える事の出来ない問題もあろう。しかし、たとえ底の見えぬ深い海が私たちの行く道を閉ざしたとしても、神が良しとするならば、その海を真っ二つに裂き、道を切り開いてくださる。その神が、私たちと「共にいる」のである。(神谷)